

出品リスト

No.	作品名	制作年	材質	サイズ (縦×横×奥行、cm)	所蔵
01	〈無題〉	制作年不詳	ガラスに着色	33.0×38.9	個人蔵
02	〈無題〉	1951年	ペン・紙	45.3×57.3	個人蔵
03	〈無題〉	1950年代	油彩・キャンヴァス	32.0×38.5 (外寸)	個人蔵
04	〈無題〉	1950年代	油彩・キャンヴァス	39.3×48.4 (外寸)	個人蔵
05	〈無題〉	1950年代	油彩・キャンヴァス	33.0×45.0	個人蔵
06	点と線	1954年	油彩・キャンヴァス	57.1×64.7 (外寸)	鈴鹿市蔵
07	〈無題〉	1954年	油彩・キャンヴァス	22.0×27.7	個人蔵
08	それは閉ざされている	1955年	油彩・キャンヴァス	65.2×90.9	名古屋市美術館蔵
09	作品	1955年	油彩・キャンヴァス	53.0×72.7	北伊勢上野信用金庫蔵
10	寓話	1957年	油彩・キャンヴァス	90.6×72.5	個人蔵
11	作品	1957年	油彩・キャンヴァス	33.5×24.3	個人蔵
12	作品	1959年	油彩・キャンヴァス	60.6×72.9	名古屋市美術館蔵
13	作品	1960年	油彩・キャンヴァス	90.7×116.0	三重県立美術館蔵
14	作品	1964年	油彩・キャンヴァス	73.0×60.8	個人蔵
15	〈無題〉	1964年	油彩・キャンヴァス	93.1×75.0	JA鈴鹿蔵
16	作品	1964年	油彩・キャンヴァス	73.0×90.5	三重県立美術館蔵
17	〈無題〉	1965年	油彩・キャンヴァス	73.0×90.8	個人蔵
18	作品	1967年頃	油彩・キャンヴァス	45.3×53.3	個人蔵
19	自画像	1969年	油彩・キャンヴァス	30.8×39.6	個人蔵
20	作品	1970年	油彩・キャンヴァス	64.7×90.9	三重県立美術館蔵
21	作品	1970年	油彩・キャンヴァス	45.0×53.0	三重県立美術館蔵
22	作品	1970年頃	油彩・キャンヴァス	46.3×54.0	個人蔵
23	作品	1970年頃	油彩・キャンヴァス	66.6×78.5 (外寸)	鈴鹿市蔵
24	作品	1970年代後半	油彩・キャンヴァス	72.5×90.5	三重県立美術館蔵
25	作品	1972年	油彩・キャンヴァス	72.5×90.9	個人蔵
26	作品	1975年	油彩・キャンヴァス	97.0×145.5	名古屋市美術館蔵
27	作品	1975年	油彩・キャンヴァス	97.0×146.0	三重県立美術館蔵
28	作品	1975年	油彩・キャンヴァス	72.7×90.9	三重県立美術館蔵
29	作品	1975年	油彩・キャンヴァス	90.9×90.9	三重県立美術館蔵
30	作品	1976年	油彩・キャンヴァス	90.9×117.0	三重県立美術館蔵
31	作品	1976年	油彩・キャンヴァス	117.0×90.9	三重県立美術館蔵
32	作品	1977年	油彩・キャンヴァス	65.0×91.0	三重県立美術館蔵
33	作品	1978年	油彩・キャンヴァス	65.5×91.0	三重県立美術館蔵
34	作品	1978年	油彩・キャンヴァス	72.7×90.9	三重県立美術館蔵
35	作品(2点組)	1979年	油彩・キャンヴァス	91.1×117.0(同寸)	三重県立美術館蔵
36	作品	1985年	油彩・キャンヴァス	117.0×91.0	三重県立美術館蔵
37	作品	1986年	木・オイルスティック	81.0×81.0×81.0	三重県立美術館蔵
38	作品	1987年	油彩・キャンヴァス	65.0×91.0	個人蔵
39	作品	1987年	油彩・キャンヴァス	65.2×91.0	三重県立美術館蔵
40	作品	1990年	油彩・キャンヴァス	72.9×91.0	個人蔵
41	作品	1993年	油彩・キャンヴァス	97.3×145.9	個人蔵

関連資料

スケッチブック 浅野弥衛使用的パレット、刷毛、鉄筆など	個人蔵
『北斗』表紙・カット原画	個人蔵
『北斗』過去号	『北斗』編集部蔵
野田理一旧蔵書籍	個人蔵
桜画廊関連資料	日野町立図書館蔵 名古屋市芸術創造センター資料室蔵

※浅野弥衛は作品に題を与えぬまま完成とすることが多くありました。
() 内の題は後の者が便宜上付けたものです。

特集展示 生誕100年浅野弥衛—描線の詩学—

会期 2014年10月1日 (水) -12月21日 (日)

会場 三重県立美術館 柳原義達記念館A室

主催 三重県立美術館

助成 公益財団法人 岡田文化財団

公益財団法人 三重県立美術館協力会

発行日 2014年10月1日

企画・編集・発行 三重県立美術館 (生田ゆき、作佐部聟)

印刷 サンメッセ株式会社

表紙 スケッチブック (1963年頃、個人蔵)

In Commemoration of the Centenary of the Artist's Birth

ASANO Yae:Poetics of Lines

1st October to 21st December, 2014

Mie Prefectural Art Museum

特集展示

生誕100年 浅野弥衛—描線の詩学—

2014年10月1日 [水] -12月21日 [日]

三重県立美術館 柳原義達記念館A室

はじめに

浅野弥衛は、1914年10月1日、三重県鈴鹿市神戸の参宮街道に面した、江戸時代から刻み煙草屋を営む旧家に生を受けました。3度にわたる応召を除き、その生涯のほとんどを郷里で過ごした浅野は、「日本人でなければできない、日本の文化風土から生まれた抽象を確立したい」と語り、一貫して抽象画の可能性を模索し続けました。晩年に至るまで衰えることを知らぬ精力的な創作活動は、同時代の芸術家たちはもちろん、今なお後進たちへ大きな影響を与え続けています。

ここでは、浅野が残した言葉に寄り添いながら、その画業の足跡をたどっていきます。

～1950年代

浅野弥衛が、いつ、どのように絵を学んだかについては、確かな記録や資料は残されていません。ただ、県立神戸中学校を卒業後、応召されて渡った旧満州から一時帰国した時、絵筆を持ったのが画家の一歩であると述懐するように、描くことへの関心は10代のころから持ち続けていました。

そのような浅野の背中を押したのが、

詩人の野田理一でした。モダニズムの詩人としての顔だけではなく、美術や骨董のコレクターであった野田に触発されて、浅野は海外の近現代美術の潮流から大いに刺激を受けます。後年浅野は、「絵については独学で、もし唯一の師がいるとすれば野田理一という詩人だ」とし、野田との思い出として、「風景は描きなさん。デッサン、デッサンというけれども、何でもデッサンなんだ。音楽を聞くことも、芝居を見ることも、うまいものを食うことみんなデッサンなんだよ。木炭で真っ黒になっているだけがデッサンじゃない」と何度も言われたと語っています（「[作家訪問] 浅野弥衛—禁欲と無欲の証し」『美術手帖』no.509、1983年4月号）。浅野にとって野田は、技術面での師というよりも、制作に臨む姿勢の手本のような存在であったことが窺えます。

父・弥吉が創立者の一人である鈴鹿信用組合の理事として、多忙な毎日を送る傍ら、浅野は自らの表現を求めて試行錯誤を続けました。50年代半ばの作品には、かつて浅野が野田の蔵書の画集で見たクレーやミロのような、海外の作家たちからの影響の跡を見つけることができます。しかし、50年代末に40代半ばで勤めを辞して画業に専念するようになると、次第に色を脱ぎ捨て、形よりも線そのものの力に開眼していく様子が、作品からも見て取れます。



『北斗』第29號
昭和27年11月5日發行

1960年代

「職業画家」として新たなスタートを切った浅野は、まず自宅玄関脇の小部屋をアトリエに改築します。広さは約四畳半。隣にはこれまで使っていた煙草販売所がそのまま残され、「街道筋に三百年来、店を開きしている浅野タバコ店に、もう一つアトリエが店を開きした形」（「朝日新聞」1962年10月6日）となり、浅野自身も制作と店番を軽々と行き来していました。

キャンバスに絵具を平らに伸ばした白い地に鉛筆などで線を刻み、そこに黒い絵具を塗り込めた後に拭き取る、いわゆる「ひっかき」技法は、浅野の代名詞ともいえるスタイルです。絵具の練り加減、乾燥度合の見極めなどに細心の注意が求められ、一旦線を引き始めると、途中で迷いやためらい、変更はご法度という制作上の制約から、常に時間との戦いであったとも言えるでしょう。50年代後半にこの「ひっかき」を手中にした浅野は、様々な線の探求に余念がありませんでした。時に厳しく、時に緩やかに、線は自在に拡散や収束を繰り返し、次第に浅野独自の世界が構築されています。60年代中頃には、青や桃色、黄色など、多彩な色の踊る良品を発表しますが、60年代末には、白と黒の支配する画面へと変化し、モノクロームに線という極限まで抑制された画風は、浅野の真骨頂となっていました。

1970年代

70年代は、肉体的にも精神的にも、画家として最も充実した時であったと言ってよいでしょう。名古屋を拠点に、現代美術に特化した桜画廊を中心として、毎年個展を開催し、同時代の画家や評論家たちとも交流を深めていきました。特に、黒地に縦横無尽に躍動する線が印象的で、75年頃には画面も大型化しています。この頃の作品について、浅野は、「一貫して目指しているのは、中心のない絵、無数に中心がある作品、額縁が完結した世界の区切りではなく、場合によっては天地縦横どちらからでも見られる絵」（「朝日新聞」1975年10月4日）と答え、まるで銀河系に散らばる星々を表したような、スケールの大きさに圧倒される思いです。

浅野の作品は、一見、子供の落書きのように、気まぐれで無鉄砲な線の集合のようにも思えます。しかしながら、画家自身「制作に取掛ると、私はもうアーティスト（芸術家）ではなくてアルチザン（職人）だなという感じがします。アーティスト的な生産活動をしているのは、寧ろ、掛かる寸前だと思います」（「[作家訪問] 浅野弥衛」、前掲書）と語るように、描く前には既に完成図が頭の中に出来上がっていました。その思考の一端は、残されたスケッチブックに探すことが出来ます。自宅の縁側から見える庭の木々のような、身の周りのものたちの観察から、幾重にも重ねられた線の戯れまで、スケッチブックを開けば、浅野がいつも何かに目を凝らし、そして手を動かして描きとめることで、対象を自らの中で整理・秩序化していく過程が良くわかります。

1980年代以降

画家として歩み始めた当初、展覧会を開催しても芳しい成果を上げられなかったことを「全機無事帰還」と自嘲気味に評した浅野も、次第にその独特的画風への支持者を得て、80年代以降は、これまでの活動に対しての評価が一段と高まりを見せました。1985年、昭和59年度名古屋市芸術賞特別賞を受賞、1987年、愛知県立芸術大学客員教授に就任、そして1991年には、三重県民功労賞を受賞します。

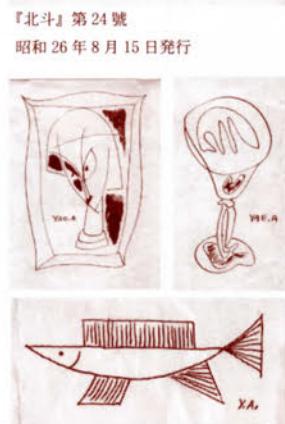
76歳の時、鈴鹿商工会議所会報に寄せた一文で、浅野は自らの歩んできた道のりを振り返り、こう記しています。「ずい分頑固な自分本位の生き方であったかも知れないが、絵に対しては常に真正直な姿勢を崩さなかったと思う。努力してそうしたのならたいしたものだがそうではない。嘘をつくには、あるいは何かに利用しようとするには、私は余りに絵が好きであった。それだけである」。それは、野田理一との出会いの最初に言われた言葉、「素直に、正直に、自分の絵を描きなさい。街うな、おもねるな、流されるな」（「昭和59年度名古屋市芸術賞受賞者紹介」のパンフレットより）とも呼応します。

1996年、三重県立美術館での回顧展が終了した4日後の2月22日、浅野弥衛は81歳の生涯の幕を閉じました。かつて友人に宛てた手紙の中で、「絵を描くことが、楽しくて、楽しくて、楽しくて、楽しくて仕方ありません」とつづった画家は、最後までその旺盛な制作意欲が枯れることはなく、アトリエのイーゼルには白地の「ひっかき」の油彩画がかけられたままでした。

（学芸員 生田ゆき）

浅野弥衛 略年譜

1914年 (大正3)	10月1日、三重県鈴鹿市神北町の、江戸時代から続く商家の長男として生まれる。
1932年 (昭和7)	18歳 旧制三重県立神戸中学校（現神戸高等学校）を卒業。陸軍士官学校へ入營、応召で旧満州に渡る。
1933年 (昭和8)	19歳 この頃、旧満州から帰國。
1938年 (昭和13)	24歳 滋賀県日野町出身の詩人・野田理一（1907-1987）との交流が始まる。
1939年 (昭和14)	25歳 二度目の応召で中国本土へ。
1944年 (昭和19)	30歳 春、中国から帰国。
1945年 (昭和20)	31歳 野田理一の勧めで、長谷川三郎主催の美術創作家協会に初出品。
1950年 (昭和25)	36歳 三度目の応召でフィリピンへ。
1952年 (昭和27)	38歳 復員。清水桂子と結婚。
1953年 (昭和28)	39歳 鈴鹿信用組合（改組・合併を経て北伊勢上野信用金庫と改称）の理事となる。
1956年 (昭和31)	42歳 このころ、同人誌『北斗』にカット及び表紙を描く。
1959年 (昭和34)	45歳 第1回個展を神戸北十日市にて開催。流木や、石、貝殻などを組み合わせたコラージュ作品を出品。そのうちの1点を野田理一に贈る。
1961年 (昭和36)	47歳 二度目の応召でフィリピンへ。
1962年 (昭和37)	48歳 鈴鹿信用組合が鈴鹿信用金庫に改組。代表理事となる。
1963年 (昭和38)	49歳 この年、美術文化協会会員になる。
1972年 (昭和47)	58歳 鈴鹿信用金庫代表理事を辞任。
1974年 (昭和49)	60歳 浅野弥衛展（11月11日-22日、桜画廊）、以降1993年までほぼ毎年個展開催。
1977年 (昭和52)	63歳 放火により焼失した鈴鹿市龍光寺の本堂仏壇の復元を描き始める。
1979年 (昭和54)	65歳 アメリカの劇作家エドワード・オールビー（1928-）が鈴鹿のアトリエを訪れる。
1985年 (昭和60)	71歳 昭和59年度名古屋市芸術賞特別賞を受賞。
1987年 (昭和62)	73歳 野田理一歿。享年79。
1989年 (平成元)	75歳 爱知県立芸術大学客員教授となる（-90年）。
1991年 (平成3)	77歳 白と黒—浅野弥衛の世界展（10月18日-22日、鈴鹿市文化会館）。
1992年 (平成4)	78歳 三重県民功労賞を受賞。
1996年 (平成8)	83歳 戦後、40数年ぶりに中国を旅行。
	浅野弥衛展（1月4日-2月18日、三重県立美術館）。
	2月22日逝去。享年81。



見開き頁に掲載の図版はすべて
『北斗』のカットから